

# 肉 牛 用 草 地

◎ 肉牛は乳牛と比較すると主要な生産物が食肉である点で異なる。ここであえて食肉と限定したのは、肉生産を意図し食味を良好にする目的で一定期間肥育を行なったこと、肥育された牛の肉であることを意味している。

食肉生産牛の前歴を探ってみると、牛の種類も多種多様で、更に肥育の時期・肥育の方法もかなり違う。

◎ 肉牛草地（素牛育成～育成肥育）は、乳牛育成草地と大きな違いはなく、まず健康ですぐれた体格を形成することが主眼となり、同時に草地の利用効率を高めるための配慮が必要となってくる。具体的にはマメ科草の割合が少なく、乾物摂取量の高い、増体に結びつく牧草を生産すること、更に牧草の季節生産性が均一で放牧期間が長いこと等が望まれる。

（札幌 山下 太郎）



←肉牛草地（北海道農業開発公社エリモ肉牛牧場）  
蹄耕法による造成草地メドウフェスク、トールフェスクが役立っている。  
放牧牛はヘレフォード種

ストックヤードの⇒  
肉専用牛（エリモ肉牛牧場にて）ヘレフォードとアンガス、いずれも10ヶ月前後の育成牛



◎ 食肉生産の我国における理想的な様式として、乳用雄子牛の粗飼料・濃厚飼料併給方式（雪印方式）があげられ、その場合、肉生産を順を追って考えると、①肥育素牛育成期、②育成肥育期、③仕上肥育期、に大きくわけて考えることができる。特に①、②の時期で肉牛用草地が重要になってくる。勿論これと同じことが肉専用牛についてもいえ、北海道では牧草（肉牛草地）を主体とした素牛育成・育成肥育を行なう牧場が増加してきている。

◎ 肉牛用草地（育成牛用草地）の混播例

——雪印 肉牛・育成牛用

草地混播種子セット内容——

オーチャードグラス（フロンティア）	2.5kg
チモシー（ホクオウ）	2.0
メドウフェスク（タミスト）	2.0
ケンタッキーブルーグラス（K・31・フェスク）	2.0
シロクロバ（ニュージーランド）	0.5
計30 a 分	11.0